1393号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2023.4.10
〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

空き家　1

木幡智恵美

消える家①

広い敷地を持ち、でーんと構えていた家が無くなった。散歩しながら、その跡を眺める。更地になった黄土色の地面にはぽつぽつと緑色のものが。もう一月もすると、緑に覆われてしまうだろう。近所のみならず、散歩で見かけるそういう場所が増えている。住む人がいなくなり、主を失った家は朽ち、やがて壊され、更地になり、さらに草地になっていく。

ただ、あの大きな構えの家は、そう古くはなかった。夫が言うには、「うちの家より後に建ったんじゃないかな」。ちなみに我が家は築三十年を超えたところだ。広い敷地に平屋建て、庭には大きな石や石灯篭が白壁の塀越に見える、そんな家だった。

その家で見かけるのは、私の親世代の男性一人。作業服で庭の木の剪定をしたり、裏庭の柿を採ったりしていた。それが数年前、私と同じくらいの年の女性が裏庭の柿を採っているところを見かけた。あの男性は具合でも悪くされたのだろうかと心配になった。それから間もなく、車椅子姿で介護車の荷台から降ろされてくるところを見た。でも、それ一度きりで、その後姿を見ていない。

散歩でその付近を通ったある日、白壁越しに庭を見ると、ダンプカーがある。庭の木を掘り起こして乗せていた。次の日は、庭石がダンプに積まれた。毎日数台の車が停まり、作業が続き、庭が終わると、家の中の建具が外された。壁の隙間から、洗濯機だの、シンクだのが見える。ここに人が居て、毎日の暮らしが在った証だ。それが一つひとつ削り取られていくのを見ると、自分の身体の一部を捩ぎ取られていくように感じる。

そうして幾日かかかって家の中ががらんどうになると、今度は瓦がはがされていく。庭に置かれたダンプに、どんどん投げ入れられていき、黒々としていた屋根が、髪の抜けた地肌のようになっていった。何日もかかって骨だけになった家は、二日ほどで崩され、跡形もなくなってしまった。白壁だけは残すのだろうかと思っていたが、壁もすべて壊され、広い更地となった。

家が消えた後も、引き寄せられるようにその場所に向かう。ある空間がぽっかりと抜けた感じ、義母が亡くなってからずっと続いている感覚と似ているのだ。

がらがら橋日記

宮森健次

二転び三起き

木次乳業の創業者佐藤忠吉翁の蔵書整理を手伝っている。力仕事なら少しは役立てるかもと始めたのだが、どう処分するかではなく、どう活かすかを考えるのはなかなか難しい。先日、忠吉翁を師と仰ぐ作家の森まゆみさんが知恵を貸してくれることになり訪ねてこられた。

ぼくは認めたくないのだが、妻に言わせるとそれで浮き足だっていたために、森さんを迎える直前に用を済ましておくべしと小走りで屋外トイレに向かったところで躓いて、したたかにおでこをコンクリートの床に打ち付けた。すぐには何が起きたのかわからなかったが、鞄を肩にかけていたために両手を着くことができなかったこと、勢いの付いた体を片手で押し返すことができず、そのまま潰れるように額を床にぶつけたのだということは瞬時に理解した。

トイレに入って鏡を見ると、床で擦ったらしく額の真ん中が親指大に皮一枚すりむいており、その周辺にさっと刷毛でなでたような傷が付いていた。見ているうちにじわっと盛り上がってきた。どうすることもできずそのまま書棚の並ぶ集合場所に行くと、蔵書整理の呼びかけ人であるK子さんがびっくりして、病院に行かなきゃ、絆創膏もらってくる、などあわてた様子で心配してくれた。そのやりとりの最中に森まゆみさんが来られ、あいさつもそこそこに、

「私の鞄の中に確か薬があったと思うけど。」

といっしょに心配してもらう羽目になった。ぼくはと言えば、おでこの真ん中がヒリヒリするだけで、他に目立って痛いところはなかった。とんだドタバタの中で森さんを迎えてしまった。

何年か前、ランニング中によく似た転び方をした。その時もアスファルトに向かっていく頭を腕で支えきれずぶつけてしまった。もとから鈍い運動神経反射神経が加齢とともにさらに鈍っているという現実を突きつけられた気がした。このまま衰えるに任せてしまうのも悔しくまた恐ろしく、体幹トレーニングの動機付けの一つにした。続けること一年半、いくらか効果を感じていただけに、再び同じ転び方、同じけがをするとはいかなることか、としばらく動揺した。

しかし、このごろになって考え方を改めた。トレーニングをしていたからこの程度で済んだ、と思うことにしよう、と。もっとひどいけが、後遺症、落ち込みに襲われる可能性だってあったのだから。そして合わせてもう一つ念じておくことにした。。事故はいつ襲いかかってくるかわからない。それを境にすべてが一変する何かから身を防ぐすべなどどこにもないのだ。この当たり前を軽視すまい、と。

30代フリーター　日本は貧乏になったと嘆く声をよく聞く。２０２１年の日本の１人当たり名目ＧＤＰは世界で33位で、２０００年の８位から大幅に後退した（国連統計）。

年金生活者　社会インフラや諸制度の整い方を考慮に入れると、日本より上位の国々の国民が必ずしも日本国民より豊かな生活を送っているとは限らない。

ＧＤＰは豊かさを交換価値だけで測る。その数字からは、生活の利便性や快適さ、つまり使用価値はわからない。刑法犯の少なさ、ダイヤ通りに動く鉄道、高過ぎない値段で手に入る衣食のモノやサービス……。そうした環境は、私たちの国が交換価値のランキングは下がっても、使用価値のランキングは上位にあることを推定させる。

少なくとも先進国では、豊かさをはかる物差しとして使用価値がウェートを増していることをこのことは示している。これまでは交換価値が豊かさを測る唯一に近い物差しになっていた。等価交換を原理とする市場が社会の基盤を成してきたからだ。その社会はあらゆるものを等価交換の対象とする。富はその交換なしには手に入らない。理由は富の稀少性にある。その稀少性が資本主義の高度化とともに急速に縮減してきたのが、日本を含む現在の先進諸国だ。

30代　その先進国で格差が広がり、貧困が問題になっている。

年金　そうした格差、貧困は使用価値で測ると、交換価値で測る場合ほど大きくはない。

30代　米欧の中央銀行が利上げを続けるなかで、日銀がいまだに「異次元の金融緩和」を維持しているのは日本経済の停滞をあらわしているのではないか。

年金　経済学者の水野和夫はゼロ金利の長期化を「資本主義からの卒業」ととらえる（２０２２年５月21日東京新聞ＷＥＢ版）。「卒業」の理由は「資本主義がうまく回って豊かになり、ゼロ金利になった」ことにある。これを私流に言い直すと、次のようになる。資本主義の高度化は、消費支出の過半を選択的消費が占めるほど潤沢な富を生み出し、人類史を長く支配してきた富の稀少性の縮減を加速した。その結果、稀少性に駆動されていた市場での競争が鈍化し、利潤を生み出す機会が少なくなって、金利の低下を招いた。

水野は資本主義から卒業したあとの経済を「蓄積した富、すでに手元にあるストックをうまく回していく経済」と説き、「企業は手持ちの資金でできる範囲で、設備投資をする。大量生産は必要ないので、労働時間は今よりずっと少なくて済む」と言う（同）。

ただし、彼は資本主義からの卒業を市場経済からの卒業とはみなしていない。蓄積した富は「回していく」し、企業は「設備投資をする」。しかし、「日独仏は『ゼロ金利クラブ』を結成して発信を」と語り、この３国に、利潤を追求しない市場経済、もうからなくても回る市場経済のモデルになるようにと提言する。要するに企業がもうけ抜きで活動することを想定している。

30代　それで人びとが株を売買し、経営者や労働者が働く気になるだろうか。

年金　少なくとも日本国民はその気になるだろう。というより、すでに日本の企業の６割以上は赤字だ。利己よりも利他を優先したがる国民のメンタリティーがそれを支えている。この心性はコロナ禍でも実証された。自分のためというより、他人を不快にしてはいけないと思って、いまだに外せないでいるマスクがそれを象徴している。

30代　東芝が国内投資ファンドへの身売りと、上場廃止を決めたのも日本経済の衰退を象徴している。

年金　「モノ言う株主」の海外投資ファンドを排除し、経営の意思決定をしやすくするのが狙いと報じられている。現在の資本主義が「株主ファースト」、すなわち「利潤第１」から離れていく兆候と見ることができる。

それは新自由主義からの離脱でもある。新自由主義の核をなしているのが「株主至上主義」だ。それは高度経済成長の時代が終わり、資本と労働が利潤を分け合う余裕がなくなったために出てきた考え方にほかならない。

高度経済成長は第２次産業を牽引車とする産業資本主義に特有の現象だった。つくればもうかる時代であり、その分け前は株主だけでなく、経営者、従業員、取引先といったステークホルダーに分配された。

右肩上がりの成長が終わり、分け合うパイが細るにつれて、企業は株主だけのものという資本主義の原理がむき出しになった。株主以外のステークホルダーを守っていた諸々の規制の緩和と、安い労働力を海外に求めるグローバル化が進行した。

それはイノベーションを促し、富の稀少性の縮減を加速する一方、格差を広げた。モノやサービスが大多数の人びとにひと通り行き渡ったことと、カネが一部の層に集中したことによって、大規模な需要は望めなくなった。

「株主至上主義」を貫けば、需要はますます細り、資本主義のシステム自体が危うくなる。

それを避けるには労働者ばかりでなく、資本家にも泣いてもらわなければならない。たいしてもうからなくてもかまわない資本主義、それほど利潤を上げなくてもやっていける資本主義を資本主義自身が求め始めているように見える。

ニュース日記　871

中村　礼治

資本主義は持続可能か